



拳銃無宿2111

12月8日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

12月8日のおはなし「拳銃無宿2111」

むささび一家の到来があってから、町の様子は一変してしまった。見ただけでわかることとして人通りが減った。特に女や子どもの姿を見かけなくなった。聞きつたえるところによると、むささび一家が慰み物にするのは女には限らず、男だろうが子どもだろうが年寄りだろうがお構いなし、目に付くものを片っ端から引っ捕らえていたぶるといのだが、だからといって家に閉じこもりきりでは生活にならない。仕方がないので多少なりとも力のある男が表に出て、自然、女や子どもを見かけなくなる。

それから全体に静かになった。大声を出して目立とうものなら、すぐ目をつけられてひどい目に合う、というので、みんなひっそりとささやき交わすようになったのだ。そうなるとリスクを避けるため、できるだけ人と会って話すような機会をなくそうとする。居酒屋など論外である。酒が入るとバカ話もしてしまうし、大声で笑ったり、怒鳴ったりもしてしまう。おまけにいかにもむささび一家が出入りしそうな印象もある。そんな危険な場所には行けないというので、先日来うちの店はがらがらだ。

考えてみたらおかしな話だ。まだ誰もむささび一家の姿を見ていないし、どんな風体なのかどこにいるのかこの何者なのか、何もわからないのに。「むささび一家が来たらしい」ってだけで町はもう壊滅状態だ。噂というのは恐ろしい。昔なら携帯電話とかインターネットとかいう便利なものがいろいろあって、隣町どころか世界中のできごとをすぐに調べられたそうだが、電気というものがなくなって以来、そういう魔法は封印されてしまった。電気の話は子どものころのかすかな思い出にある。

「こうなるとむささび一家でもいいから食べに来てくれたらねえ」

テーブル席のセットをしながらかみさんが言う。調味料が終わって、割り箸をつめているところだ。

「冗談じゃねえ。むささび一家に目をつけられたが最後、店の上がりごと洗いざらい持ってかれちまうって話だ。閑古鳥が鳴いていた方がまだましだ」

「あら、意外と紳士だって噂もあるってよ」

「へっ。紳士が聞いて呆れら。じゃあなんだってんで、みんなその紳士さまを避けてるんだ」

がらりと戸が開いた。

「いらっしゃいませ」反射的に威勢よく声をかけてからあわてて口をつぐんで目を上げると、見かけない若い男がそこにいた。テングロンハット。着古した革のジャケット。ぼろぼろだが頑丈そうな生地ジーンズにカウボーイブーツ。背中には大きな薄汚いずだ袋を背負っている。ジャケットに隠れて見えないが腰のあたりにはなにやら物騒なものを隠していそう。男は無表情なまま指を1本立てる。

「へいお一人様ご案内」

「お一人様いらっしゃいませ」

かみさんがメニューを持って男に近づき、声をかける「カウンターとテーブルどちらがよろしいですか」

若い男はかみさんに目を向けると、不意に目を見開き食い入るようにかみさんを見つめる。黙ったままかみさんの着物の襟元あたりを凝視しているかと思うとつばを飲み込んだ。はっきり喉がぐびりと音を立てるのが聞こえた。まずいんじゃないか。おれは思った。女っ気ナシに渡り歩いてきたのだろう。確かに若くはないが、自慢じゃないがうちのかみさんはこれでも若い頃は町を歩けば男どもが振り返り郵便配達自転車の自転車はひっくり返るといふ容姿の持ち主だったわけだ。男でも子どもでも老人でも見境なしのやつらからすれば十二分に過ぎるってものだろう。しまった店に立たせるんじゃないか。

「テーブルで」

かすれた声で若い男が言う。傍目にもわかるくらいかみさんがふうっと息をつき、厨房から良く見えるテーブル席に案内する。飲み物の注文だけ取って、ご注文お決まりの頃にまたうかがいますと言い置いて、「生一丁入ります」と声を張り上げながらかみさんが厨房に駆け込んでくる。やけに慌てて入ってくるなりおれに声もかけずに奥に行こうとする。「おいどうした、何か言われたか」

かみさんはおれに厳しい目を向けてくる。妙にあだっぽい視線だ。と、何も言わずに奥に入った。通称「楽屋」という内輪のたまり場だ。どうしたんだろう、気が気じゃないがとりあえず生ビールを男のところに運ぶ。いまは男はうつろな目をしてメニューを眺めている。つまみを数品注文するので、かしこまり！と応じ、厨房に戻る。できるだけおれが相手をした方がいいな。あいつ襟元から胸までのぞき込もうって勢いだったからな。腰のあたりの物騒なものはジーンズの中にもしまっているに違いない。あぶねえあぶねえ。かみさんには、もう出てこなくていいって言ってやろうか。

その時かみさんが奥から出てきた。
「おめえ、今日はもう厨房から……」いいかけておれは口をつぐむ。かみさんが5歳くらい若返っている。「おいなんだそれは、その」
「あんた注文取りに行っちゃったのかい」
「え？ そりゃおめえ」
「だめだよ。あんたはもう厨房から出なくていいからね！」
「な、なんだ？」

なんだ？ そりゃあ。逆だろうがよ。それはこっちのセリフだろうがよ。見るとかみさんは妙に背筋を伸ばして胸を張って、襟元に手をやると項のあたりを押し広げて、本日のオススメのボードを持って男のところに近づく。バカ野郎。何をやってるんだ。はらはらしながらも、注文の品を早く出さないと機嫌を損ねて暴れ出すかもしれない。おれはもう気が気じゃないが手早くつまみを整える。どうしたわけか、かみさんはいつもより小声でしゃべっているようで、「じゃあこれを」「うまそうだね、それも」という男の声しか聞こえてこない。何をやってんだ。ちらちらカウンター越しに見るんだが、かみさんの背中とボードのせいで男の様子がまるっきり見えない。

不意に男が首を回し、こっちに向き直ると不敵な微笑みを浮かべてじっとおれを見つめた。なるほど後家殺しタイプの男前だ。恋愛劇の主人公になっておばさま方をきゃあきゃあ言わせるタイプの美形だ。でも、だからって何だ、その満足そうな微笑みは。ご馳走を前にした食いしん坊みたいな、いまにも舌なめずりしそうなその顔つきは。

「おいしそうですね。どれもこれも」
「へっ？ へい。ありがとうございます」
料理のこと言ってるのか？ それともぬけぬけとかみさんのこと言ってやがるのか？ 何なんだその爽やかな笑顔は。おれをバカにしているのか。
「あのお客さん、どちらから」

「もう聞いたわよ！」かみさんが振り向くなりおれに釘を差す。知らねえよ。聞こえねえんだから。しかも続きはナシかよ。聞いた答の解説はナシかよ。そう思っていたら若い男が自分で答えた。

「どこってこともなく渡り歩いてます」
やっぱり。

「行商をしたりしながらね」
何を行商しているんだか。どうせ法外な値段でクズを売りつけているんだろう。いらぬなんて言ったら大暴れして。まさかここでも何か売る気じゃあ、あるまいな。

「それと、狩りのようなことを。旦那、むささび一家をご存じですか」
「えっ？」何だ？ 変なことを言わせて因縁を付けるつもりか。「ええ、まあ、噂だけは」

「ひどいやつらでね。」ぬけぬけと若者が言う。「あちこちで悪さを働いて」
「あら。わたしは、意外と紳士だって噂を聞きましたわ」聞いたことがないような若々しい声で
かみさんがフォローする。「お会いしてみたいなあ、なんて思ったり。おほほほほ」

このバカ。調子こいてんじゃねえぞ色ボケ女が。
「会いたいですか」若者が背筋を伸ばしてかみさんに視線をねっとりとした送りながら言う。「
本当に、会いたいですか」
ああバカ。なんでそんなうっとり見返してんだよ。
「ええ。お会いしてみたいです」
「汚いもんですよ」くそ。なんだその自信たっぷりの言い回しは。「汚いし、におう」
「いいえいいえ。そんなことはありませんわ」つくりもののセリフめいた調子でせっかちに、かぶ
せるようにかみさんが言う。ジュリエットか。おまえはジュリエットか。「野性的な魅力ですわ
」

「そうかな」若者は言うはずだ袋に手を突っ込み、中から、口を縛った小さな袋を取り出した。
袋はもぞもぞと動いている。袋の口をほどくと、さらに中に手を差し入れ、じたばたもがく生き
物を捕りだした。巨大なドブネズミみたいな顔をしている。「こいつが大将です」

「むささび？」おれは聞いた。「ほんもののむささび？」
「ええ。見るの初めてですか？ こいつ、捕まえて離してやるとまたどこかの町に行って悪さを
するんです。昔は一匹だけだったのが今では一家を構えて、5匹で暴れるから被害も膨れ上がる一
方で。残りも袋の中にいます」
なるほど大将を取り出した後の袋もまだもぞもぞ動いている。
「むささび一家？」かみさんが確認するように聞く。「これがむささび一家？」

「今度も無事に捕まえることができました」若者は爽やかな笑顔を振りまきながら言う。「離す
のはこの町からたっぷり離れた場所にしますよ」
「じゃあ行商しているってのも」ホントなんですかねと言いかけて、あわてていいやめる。疑って
いましたっていうようなものだ。「その袋の中に？」
「ええ。そうそう」若者はキラリと白い歯を光らせてかみさんに向かった。「いまオススメなの
がこの、首すじのリンクルケア商品で。おかあさん、いかがです」

いつもより濃い口紅を差したかみさんの口角の右端が小刻みにぴくぴくと引きつれるように動
いた。怪我をしたくなかったら、今日のかみさんには話しかけない方が良さそうだ。

(「首すじ」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

拳銃無宿2106

<http://p.booklog.jp/book/39945>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39945>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39945>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.